

Title	杉田玄白をめぐる人々(その二)
Sub Title	Some persons around Genpaku Sugita (杉田玄白) (II)
Author	松崎, 欣一(Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1984
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.54, No.1 (1984. 8) ,p.37- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840800-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840800-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 杉田玄白をめぐる人々（その二）

松 崎 欣

一

杉田玄白晩年の日記「鷦<sup>(1)</sup>斎日録」（以下、「日録」と略す。）には、漢詩、和歌、俳句、その他あわせて五〇〇篇ほどの玄白の詩作が書きとめられている。そのうちの一〇〇篇ほどについては、その詞書きなどによって玄白周辺の特定の人物との何等かの関わりで詠まれたことがわかるものである。前稿において、そのうち玄白の近親者に因む一四篇、また門人、知友を偲ぶ一七篇ほどの漢詩を中心とした作品をみた。すなわち、父甫仙、姉、妹さえ、妻登恵、養嗣子伯元とそのもとに生まれた恭卿、白玄、鶴という三人の孫、娘道とともに生まれた怡太郎となお一人をあわせた二人の孫、そして伯父何仏である。また門人、知友のうち、中川淳庵、平賀源内、桐生、藤川良節、佐々木担藏、樋口道泉、目黒道琢、篠崎三伯、村山仲忍、山本未白、岡部丈右衛門、秋香院、梅田氏、福井氏、三井氏、山崎氏に関わるものでいざれも追悼・追想の詩篇であった。知人の範囲については現状では個々の人物伝

が必ずしも十分には明きらかになつていないので不明なところが多いが、諸藩の医師と小浜藩関係者が多いという事実をみるとこれが出来た。本稿ではなお引き続いて、前稿でふれることの出来なかつた門人・知友に関する作品の中でも、それぞれの帰郷などに因んだ送別賦（いすれも漢詩である。）とその周辺について検討してみよう。

なお今回、「日録」所載の玄白の漢詩全篇の訓読を慶應義塾大学文学部中国文学研究室金文京氏にお願いすることが出来た。漢詩作品として必ずしも完成度の高いものとは言えず、失韻その他の破格も間々あること、また「日録」そのものに虫食いがかなりあって、刊本にあわせて原本の写真複製版を参照してもなお完全に読解できない部分もあり、また「日録」所載の漢詩をほぼのせている「鷦<sup>(2)</sup>斎遺稿・詩之二」（以下、「遺稿」と略す。）があつてこれを参照しても読解しにくい部分もあることなどの難しさが多くある中で、貴重な時間をさいてご協力をいただいた。成果を未だ十分に生かし切れてはいないけれども、このことによつて玄白晩年

の世界を具体的なかたちで探る重要な手がかりを得たことは疑いない。心よりお礼を申し上げる次第です。なお筆者の力には余ることであるけれども、これらの漢詩作品は近世中期の江戸の知識人の作品そのものとしてさらに十分な注解、評釈を試みる必要ある作品群であると思う。

「遺稿」は前述のように「日録」所載の作品をほぼカバーして、しかもそれを順次抄出し場合によつては字句に改変を加わえて推敲をしたようなかたちになつてゐる。「日録」の記載年代は天明七年（一七八七）正月朔日より文化二年（一八〇五）三月二十五日までである。これと対照すると「遺稿」はややすれて天明七年十月十七日から文化元年九月六日までの作品をまとめていることになる。ただその理由はよく判らないが、「遺稿」にあって「日録」にないもの、また「日録」にあって「遺稿」にない作品も若干存在する。本稿に引用した「日録」、「遺稿」に共通の漢詩作品については原則として「日録」に記載されたかたちによるが、虫食いなどで判読できない部分について、また一部の用字については「遺稿」に従つたところもある。これらの点については個々の注記を省いている。

## 二

玄白の漢詩作品のうち門人知友に関する送別賦はかなり多数ある。それらを大別すると、門弟の修業がなつてそれぞれの故郷へ帰る日に因んで創られたもの九名について十一篇、またその他の知人（門弟を含むかもしがれない）の旅発ちにさいして贈られたも

の九名について九篇という二つの作品群に分けられる。まず前者についてみてみよう。

## △木公幹△

「日録」の享和二年（一八〇二）四月十三日条に次のような長篇が記されている。

送木公幹帰勢州 木公幹の勢州に帰るを送る

行路難兮行路難 行路は難し行路は難し

天下何物最為難 天下に何物か最も難しと為す

行路難可馬可船 行路の難は馬す可く船す可くも

人情難難於上天 人情の難きは天に上るよりも難し

天猶可上才難得 天は猶お上る可きも才は得難し

子曰才難其不然 子曰く才難しと、其れ然らざるや

孔門子弟三千士 孔門の子弟三千士

就中撰去七十賢 就中撰び去れる七十賢

距今星霜三千歳 今を距つこと星霜三千歳

挫名微存竹帛伝 名は挫じけ微かに竹帛の存して伝わる

悉星夫子親教授 星を悉くして（？）夫子親しく教授し

風化不衰礼樂全 難哉人物実難得

德行文學誰翩々 難き哉人物は實に得難し

愚老門下二三百 德行文學は誰か翩々たる

何幸僅得一二客 愚老の門下二、三百

何ぞ幸いにして僅かに一二の客を得

勢州木貞字公幹 勢州の木貞、字は公幹

所為風浦称三益 為す所風流にして三益と称さる

従遊三年日問奇

従遊三年日ごとに奇を問い合わせる

奇字問尽欲何之 奇の字問い合わせて何にか之かんと欲す

吾道今日向西去 吾が道今日西に向いて去く

多少道人拭目知 多少の道人目拭いて知らん

勢州の木貞、字は公幹という。漢詩中の表現であるためにフルネームがわからない。「日録」中にも他に関連の記事がなく手がかりがないが、三年の修業を終えて故郷に帰る門弟として白居易の太行路の名句、「行路難、水に在らず山に在らず、只だ人情反覆の間に在り」をふまえて得がたい才子であったと讃えている。孔門の子弟三千士、愚老の門下二三百という。その優劣は比すべくもないが、しかし秘かに秀れた門弟の多きことを誇り自らを孔子に擬えている。その中でも三益の友と称された逸材公幹を介して吾が道が西方に拡がることを期待して餞の詩篇としているわけである。

文学的表現ではあれ孔子に比しているのはいささか僭越との誹りを免かれないのであるが、かえって玄白の自信とまた邪氣の無さを感じさせよう。

#### △大槻玄沢

玄白の数ある門弟の内でも、大槻玄沢は文字通り名実ともに第一人者といえるであろう。名は茂質、字は子煥、磐水と号し玄沢は通称である。宝曆七年（一七五七）九月陸奥国磐井郡中里に生まれ、父は一関藩医であった。十三歳の時に同藩医建部清庵についた。安永七年（一七七八）江戸に出て杉田玄白の門に入り、さらに前野良沢にも師事した。天明五年（一七八五）長崎遊学、同年仙台藩医に抱えられ江戸詰となつて、学塾芝蘭堂を開いた。

文化二年に著わされた玄白の隨筆「玉味噌」には、  
かゝる事もありしにより、虚名ながらもしたひにひろこり、  
東海道にては伊勢、尾張、三河、遠江、甲斐、相模、上総、常  
陸、武藏、安房十ヶ國の間にも、名をしたひ門に入るもの廿六人  
有。東山道にてハ美濃、信濃、上野、下野、陸奥、出羽六ヶ國

「蘭学階梯」「瘡医新書」「重訂解体新書」をはじめ多くの著訳書をまとめ、文政十年（一八二七）三月、七十一歳で歿した。<sup>(6)</sup> 「日録」には記載されていないが「遺稿」に「送大子煥帰省一関、大子煥の一関に帰省するを送る。」と題する、次のような長篇がある。

奥羽両州半天下 奥羽両州は天下に半ばす

嶮峻之山千里野 嶮峻の山千里の野

河海無処不相通 河海処として相通せざる無く

城邑豪族連大廈 城邑の豪族大廈を連らぬ

聞道人物出於茲 聞道人物は茲に出ずと

就中卓犖知是誰 就中卓犖たるは知んぬ是れ誰

磐井河辺大子煥 磐井河辺の大子煥

過我從遊年幾移 我れを過ぎりて從遊すること年幾たびか移る

日居月諸将五歳 日居月諸将に五歳ならんとし

朝論太玄夕問奇 朝に太玄を論じ夕に奇を問う

奇字伝得出藍器 奇字伝い得たり出藍の器

英名早成聞一時 英名早に成りて一時に聞こゆ

諸侯邸第縉紳宅 諸侯の邸第縉紳の宅

相迎相逢日追隨 相迎え相逢いて日に追隨す

問汝何為故郷帰 汝に問う何為ぞ故郷に帰るや

汝云桑梓不敢違 汝は云う桑梓敢えて違えず

高堂雙親今已老 高堂の双親今已に老いたり

帰省欲裁五彩衣 帰省して五彩の衣を裁せんと欲すと

正知彩衣兼唇錦 正に知る彩衣は唇錦を兼ねるを

昼錦人称古来稀 昼錦は人古来稀と称す

此日臨別我何説 此の日別れに臨んで我れ何を説かん

大夫処世須雄飛 大夫世に処して須らく雄飛すべし

自今但待趣庭後 今よりは但だ待つ趣庭の後

再遊東都倍光輝 再び東都に遊んで光輝を倍するを

奥州磐井の逸材が私のもとで研鑽を積むこと五年、才を發揮して文字通り出藍の器となつた。縉紳諸侯の招きはひきも切らない中で郷里へ帰ることを望んでいる。聞けば老いたる両親への孝養の機会を得たいということである。よし故郷に錦をかぎり孝を尽せ。そして再び東都に戻り光輝の旧に倍するを待つこととしようという意であろう。

大子煥すなわち大槻玄沢を送るというこの詩は「日録」になくその年次が確定できないが、「遺稿」の第十六番目に記載されて前後の作品との関係からすれば天明八年の作品かと考えられる位置にある。ところで玄沢の江戸修学当初の閱歴をやや詳しくみると、安永七年三月に修学二年の約束で江戸に出たあと、同九年に更に二年の延長を許されている。天明二年五月に帰郷して結婚、八月には江戸屋敷勤番を命ぜられた。天明四年六月に父の病のため再び郷里へ帰り、七月父を見送って八月に家督を継いだ。翌五年二月藩主に従つて江戸屋敷に至り、十月には長崎遊学に出立した。六年五月、江戸に帰り本藩仙台藩に抱えられ芝蘭堂を開いた。翌七年九月、再び帰郷して母と妻子を伴い十二月には江戸に帰っている。すなわち、安永七年の出郷後、郷里へ帰ったのは天明二

年、四年、七年の三回である。このうちのいずれをとるか。ここで、詩に詠まれた事項で文学的潤色の余地がないと思われる、「玄白のもとでの修業五年」「両親に逢う」という事実に注目すれば、出郷後足かけ五年経過し、父親の病歿前である「天明二年」が符合することになる。広く各界に英名を馳せたということを文字通りに解釈すれば後年を考えるべきかもしれないが、この点はむしろ文飾表現ともみることが出来るよう思う。「遺稿」の記載位置に疑問が残るがなお後考をまたねばなるまい。ともあれ大槻玄沢が玄白の期待を大きく背負っていた存在することがよく判る作品である。

玄沢について「日録」には数件の記載がある。天明七年一月から二月にかけての記事を抄出してみると——一月二十三日「玄沢眼痛急□□□□□温酒ニテ用ヨト幸叔云。」二十四日「玄沢持薬幸叔金□子丸進。」一月五日「タ玄沢ヘ参、湿毒眼中脣中アル□小キ穴ヘ炙シテ良、又□枝葉分チなく煎し与て良、又裏白茎上皮ヲ茹テ□し与フ。」——と記されている。玄沢の眼病を記録して「日録」の記事としては珍しく具体性のあるものとなっている。同年三月十五日には、「元俊来、清女来、伯元暇乞のため也。夕近所病用。夜玄沢宅へ行、元俊へ別。」とある。この時、伯元は小石元俊について修学のため京に上ろうとしている時であった。そのための往来の中に玄沢の名が見える。同年九月より年末までの記事は、——九月二十一日「大槻玄沢発足」、十一月二十二日「玄沢書状」、十二月五日「玄沢着」、十二月十九日「夜玄沢宴」——とあって、前述した帰郷のことが記録されている。

天明八年になると、——一月七日「夜栗山着之由にて玄沢宅□」、同月十一日「玄沢方御番医被仰被仰付由」、四月二十八日「玄沢御側医被仰付」——とあって仙台藩医としての玄沢の昇進を記録している。栗山はいうまでもなく柴野栗山であって、玄白とは後々まで親交があつたが、幕府の招きで江戸に出た栗山を玄沢宅で歓迎したものであろうか。玄沢についての「日録」の記録は以後しばらく絶えて、寛政七（一七九五）年十月十五日に次のように記されている。

大槻の主し既に福録<sup>(マヤ)</sup>を望の日に妻むかへ給ひてんと定め、翁か孫□の榮へをあやからんと迎える妻の名改て□んと望れ侍れ□より名ハ高砂の主なれば外に足らざることも侍らす、只相老の久しきにこそあらまほしけれはお久と名乗給へと申送るとて□□□り狂歌して

世中の神なし月に末栄ふ宿住吉□□□□かみさま、

玄沢は配偶者に恵まれなかつた。<sup>(8)</sup> 天明二年、初めに娶った斎氏には寛政三年に死別している。結婚生活九年であった。次の平田氏とも寛政四年から同七年五月まで死別しなければならなかつた。三人目の妻は若狭藩士の娘であつて牛込藩邸内に生まれた者のため也。夕近所病用。夜玄沢宅へ行、元俊へ別。とある。このとき、伯元は小石元俊について修学のため京に上ろうとしている時であった。そのための往来の中に玄沢の名が見える。同年九月より年末までの記事は、——九月二十一日「大槻玄沢発足」、十一月二十二日「玄沢書状」、十二月五日「玄沢着」、十二月十九日「夜玄沢宴」——とあって、前述した帰郷のことが記録されている。

る。「日録」中の玄沢に関する記事はこれですべてである。その取りあげられたは恣意的にも見えるけれども玄沢の身辺に起つた重要事についてほぼ洩らさず記録されているようと思う。このことは、我々の知っている玄白周辺のいわゆる蘭学史上の著名人物とそれに関する事項について「日録」中の記録量があまり多いとはいえない中で注目してよいことであると思う。

## △高野玄斎△

「日録」の文化二年（一八〇五）正月八日の記事は「鏡開来客如例、土佐座見物」とあるがその前に「餞別高野玄斎帰郷、高野玄斎の帰郷を餞別す。」と題して、

遊子迎春還水沢 遊子春を迎えて水沢に還り  
烟霞行映客中顔 烟霞行くく映ず客中の顔  
業成歳月帰家嘆 業は歳月に成りて家に帰りて嘆く  
白駒頻過白駒山 白駒は頻りに白駒山を過ぎるを

という作品が書きとめられている。玄斎は奥州水沢の留守家に医をもつて仕えた高野元瑞の長子として生まれ、文政十年（一八二七）七月に五十三歳で歿している。あの高野長英の伯父でありのちに養父となる人物である。<sup>(9)</sup>江戸に出て玄白に師事したわけであるが、その正確な時日は「高野長英伝」などには必ずしも明記されていない。その点で「日録」のこの記録は一つの手がかりを与えることとなる。白駒が白駒山を過ぎるを嘆くということで文学

的表現ではあれ時間の経過を示しており、江戸へ出たのがこの時点より数年以前であったことを示唆するものであろう。

又、「高野長英伝」によればこの詩篇は玄白の筆になる紙幅として高野家に伝えられたこと、さらに「享和甲子馬日作」（享和四年〔文化元年〕）という玄白の別の詩軸も同家に伝えられたことが知られる。<sup>(10)</sup>その詩軸は、

人生三万六千日 人生三万六千日

已過二万七千余 已に二万六千余を過したり  
山花水月俱無改 山花水月俱に改まる無きに  
親友年々多不如 親友年々多くは如かず

というものであるが、この作品については、「日録」文化元年（一八〇四）正月五日にもそのまま記録されている。前年の大晦日に「明日ありと思へハ嬉し大晦日」と詠み、続いて元日に「去年の雪花の春咲今年かな」、そして二日には「かくれなき大果報者出迎へハ福の神く」と記したのちの作品である。この月はまた亡妻とえの十七回忌を迎える時でもあった。十九日は、「十年余り又七とせの今日までもおくれて残る花の身そうき」と詠んでいる。これらの詩作を通して、思いがけずも長寿を保つた幸いを思い、一日くを大切に生き、そしてまた間もなく亡妻のもとへ赴くことになるであろう自らの姿を静かに見つめているこの時期の玄白の心情を汲みとることが出来るよう思う。

この人生何日と数えあげる筆法は玄斎を送り出した翌文化二年

正月二日にもあり玄白の同様の心境を伝えている。すなわち、「翁享保十八年九月十三日出生至今日七十二年六ヶ月十六日、此日數「一万六千十六日」とあって三篇の漢詩を記しているがそのうちの一篇は次の通りである。

自遣　　自ら遣る

二万六千十六日 一万六千十六日

生来経過至今日 生来経過して今日に至る

多少是非無人知 多少の是非人の知る無きも

自知万事一難必 自ら知る万事は一難必ずなるを

ともあれ、高野玄斎との離別の折りに前途有為な青年への一つの戒めの意味をこめて先きの詩篇が書き与えられたものであろう。

なお、離別後二年近く経過しようという文化三年と思われる年の十一月十九日付の玄白から玄斎に宛てた書翰が残されている。<sup>(11)</sup> 玄斎から贈られた硯（この時、玄斎は大槻玄沢にも硯を贈つている。）についての謝意を伝えるものであるが、併せておそらくは玄斎からの問合せに応えた近況報告の書状である。当春、二度目の類焼を受けたが普請もなつたので心配はいらないこと、年老いたこと故、治療の仕事も多くは伯元と立卿にまかせて「静に性を養事第一に日を消」しているが、あえて老人の診療を受けようという人もある、「無拗相勤」めることもあるが、「先相應に相勤」めているので心配しないようにという。そして、「如何爾來御模

様承不申候、御治業不相替行れて御生産も相應に相立申候哉」と門弟の仕事を心にかけてその様子を尋ねている。玄白、玄斎両者の間柄の密なることを推測しうるよう思う。

なお高野長英も文政十三年に江戸へ上り、翌年、吉田長叔につくまでの暫くの間、杉田伯元の門に入っている。この時、長英としては寄宿をもとめたようであるが謝絶されたようである。<sup>(12)</sup>

△内村覚端・堀内林哲・高橋玄勝▽

いずれも米沢藩医である。幸いにして、小川鼎三、片桐一男、酒井シズ氏らによる堀内家文書の研究がなされており、米沢藩医堀内家とその周辺についての状況がかなり明きらかにされている。

以下に注記するようにそれらをも参照しながら、検討をしたい。

玄白と米沢藩および高鍋藩との関係はかなり密接なものがあつたといつてよいであろう。その接触がいつどのようにして始まったのかは定かでないが、「日録」の記事によれば、すでに天明七年（一七八七）に、五月四日「長者丸秋月様御病用。米沢老侯拝謁」ということがある。米沢藩前藩主上杉鷹山（治憲）の実父である日向高鍋藩前藩主秋月種美を長者丸の高鍋藩下屋敷に診察し、また鷹山に拝謁しているのである。この後の「日録」にもなお相当数の関係記事がみられる。「秋月」「高鍋」「米沢」などの名を摘出すると——寛政二年七月二十四日秋月様夜河内様召、同年十一月二十日秋月様出、同十二月二十七日秋月様御病用、寛政三年四月十二日秋月様出、寛政十一年六月二十四日米沢公出、同年八月二十五日長者丸診、同年十二

月二日秋月候藩医館元正□死、寛政十一年四月二日米沢公召、同年同月十六日米沢侯二本松出、同年五月十日青山長者丸へ出——ということになる。天明七年八月の場合、鷹山は秋月種美的看病のために八月十七日に国元を出立しており、江戸到着早々にしての玄白との面会ということになる。種美的病気は年来の顔面の腫物が増大して悪化したというもので、九月二十五日には歿しているが、はじめに江戸の医師西良仲、のちに米沢から派遣された藩医堀内易庵（忠智）が治療にあたり、玄白も相診をもとめられたものであった。六月十二日にも玄白は診察をもとめられている。

鷹山はすでに天明五年二月、三十五歳の若さで治広に家督を譲

つていたが、その後も藩政に多くの事蹟を残しており、とくに医学の振興については、寛政四年（一七九二）八月江戸より本草家佐藤平三郎を米沢に招き薬草園を開き、寛政五年十一月には好生堂と名付けた医学館を開き藩財政悪化の中にもオランダ製の外科器械を購入するなどの尽力をしている。また侍医その他優秀な医師を江戸に派遣して修業させるということも行っている。寛政元年四月、易庵の子である堀内林哲（忠明、忠意）は江戸詰となり七月二十七日に大槻玄沢の芝蘭堂に入門し、またこの前後に玄白にも師事したと考えられる。同年四月、内村洞翁（覚端）も杉田玄白方に寄宿入門し翌年帰郷している。<sup>(17)</sup> やや遅れて同じく藩医の桑嶋雲白（貞白）も寛政五年に玄白に入門している。「日録」の寛政十年八月朔日には刊本によれば、「桑島員伯帰郷」とある。

写真複製版によれば不鮮明で判読しがたいが「貞伯」とも読みうるので併記しておきたい。高橋玄勝（桂山）は寛政八年二十二歳

の時、杉田玄白に師事し同十三年京都の竹中文卿につき、さらに長崎に出て吉雄献作に師事して享和二年、江戸に帰って十一代藩主治広の侍医となつた。<sup>(19)</sup> 彼等の江戸における就学の実状はよくわからぬが、「日録」には次に見るようになぞぞれの帰郷に際して作られた詩篇が記録されており玄白との関係を垣間みることが出来る。

まず内村覚端については二篇ある。寛政元年九月二十四日には「覚端発足」と記されたあとに、「送覚端帰郷省視大人病、覚端の帰郷して大人の病を省視するを送る。」と題して

思親千里白雲端 親を思う千里白雲の端

此去何論行路難 此の去、何ぞ行路の難を論ぜん

聞道鄉閨冰雪早 聞くならく郷閨は冰雪早しと

帰時應作王祥看 帰りし時應に王祥と作りて看るべし

とある。冬、母のために鯉を取らんとする時に氷が自ら割れて鯉を得たという晋の孝子王祥の故事をふまえて覚端の帰郷を送ったものである。また寛政十年四月八日にも林甫俊、高橋玄勝への餞別の詩篇とならんで、

送覚端帰米沢 覚端の米沢に帰るを送る

帰鞍東去白河閨 帰鞍東のかた白河の閨に去らば

閑外鄉雲一解顔 閑外の郷雲一に顔を解かん

拭目親朋迎汝処 目拭いて親朋汝を迎うる処

交情応似不忘山 交情は応に不忘山に似るべし

とある。業なつて帰郷した覚端を故郷の山河同朋が喜んで迎えるであろうとして門弟の出立を送っているものである。なお覚端の嫡子内村元智（直高）も文化三年八月に玄白に入門し、さらに翌年土生玄磧について眼科を修業している。<sup>(20)</sup>

堀内林哲については「日録」の寛政三年四月十九日に

送林哲帰郷 林哲の帰郷を送る

玄都三歳煉金丹 玄都に三歳金丹を煉り

丹熟携帰鳥海端 丹熟し携え帰る鳥海の端

正識天涯披囊処 正に識る天涯囊を披く処

親朋拭目為相看 親朋目拭いて為に相看んことを

とある。滞京三年の医術修業の成果を故郷の人々に大いに評価してもらおうというものであろう。林哲の生年は不明であるが、文

化八年閏二月十八日に歿している。<sup>(21)</sup> なお堀内文書として伝えられる多くの書状があり、米沢と江戸、玄白と米沢藩医とを結ぶ興味深い事実を見ることが出来る。小川氏らの研究に拠って以下に引用したい。

文化元年八月二十日付の玄白から林哲にあてた書状<sup>(24)</sup>は、七十年來の天候不順を心配し、また近年の諸所の天変地異を次のように数えあげる。

。酒田の大麥（文化元年六月四日の羽前羽後の大地震とそれに伴う洪水）  
。浅間抜（天明三年の浅間山爆発）  
。薩州霧島の焼（安永八年の桜島爆発か）  
。肥州天草の焼（寛政四年一月から四月にかけての島原領温泉岳の噴火と地震、盾山の崩壊による大水害）

思われるものは、同年十月二十五日の江戸大火による玄白宅類焼の見舞として林哲・洞翁兩人が白銀一枚を贈ったことに対する礼状である。<sup>(22)</sup>

杉田玄白をめぐる人々（その二）

寛政九年十二月十一日付の玄白から林哲にあてた書状がある。<sup>(23)</sup> 前月十五日付の林哲からの書翰を受けて、まずお互の安否を確かめあい、江戸、米沢ともに痘瘡流行の中で林哲の子女も罹患し全快したことを知つて安堵したことを伝え、そして野鴨を贈られたことに礼を述べる。ついで、患者の尿血の原因を究めるために林哲が猿の解剖を試みたことを賞し、「兎角医者は医者臭程に平日好て心頭に不忘は自然と古人未発之所も出来申事御座候、未春秋に富候御身分折角御心懸可被成候」と激励をしている。さらに寛政九年十一月二十二日の玄白宅の類焼を伝え、「箸一方無之と申候類焼に候得共、幸に蘭書之分は土蔵納候故無恙候」と知らせ最後に「小詩仙堂罹災因賦」と題して漢詩二篇を書きとめたものである。

化石（石蛤、石螺）が堀り出されたことからみるとこの辺りも昔は海だったことになる。天変地異による大地の変貌は誠に恐ろしいものだ。ただ不朽なのは名と徳であつてあなたも油断なく出精なさるべきだと訓戒を述べている。<sup>(25)</sup>

文化五年八月二十八日付の玄白から林哲にあてた書状<sup>(26)</sup>は林哲よりの「本月十五早便」に対する返書で、米沢藩主上杉治広と後見者上杉鷹山の病状についての問合せに答えたものである。まず江戸滞在中の治広の病状（足の親指の根元の腫物）を診た玄白の判断が報告される。そして米沢にある鷹山の病状（膝の病気）について侍医である林哲の報告についての玄白の見解を述べている。そして「十思一見の仮如<sup>(27)</sup>の通り直に拝診申さず候上、愚老の義度々拝診候ても眞実の所は相分らず候義、殊に御容体書ばかりにては猶更の事に御座候、去りながら御尋ねにつき愚案申し述べざるも如何ゆえ御懇意に任せ申し入れ候」と書き添える。「御懇意に任せ」とあることに注目してよいだろう。この他に蘭の植え方を伝授しまたこの年会津藩将兵が蝦夷地に派遣されたことを話題とするなどという興味深い書状である。

文化七年四月十六日付の玄白から林哲にあてた書状<sup>(27)</sup>は、当年十七歳に達した玄白の近況報告ともいべきものである。「世事共ハ伯元立卿兩人ニ仕懸、療治も心ニ向次第二致シ余年を楽居申候。（中略）今年際り／＼と存、花紅葉を老人一二三輩懇意之方申合、無油断見歩行申事候。」と書き伝えている。

高橋玄勝については「日録」の寛政十年四月八日条に次の詩篇がある。内村覚端、林甫俊への餓別の詩を贈った同日に記された

ものである。「製芙蓉図餓高玄勝、芙蓉図を製し高玄勝に餓す。」と題している。

都門送別難成詩 都門の送別詩を成し難し

空對離筵恥才拙 空しく離筵に対し才の拙きを恥ず  
開絹漫拵芙蓉峰 絹を開き漫に芙蓉峰を拵えば  
白頭翻似絶頂雪 白頭は翻つて絶頂の雪に似たり

なお堀内林哲の嗣子素堂（忠竜、忠寛）は文化八年に父死亡のあとをうけ十一歳で遺跡相続し、文化十三年には高橋玄勝のもとに預けられて医学修業をしている。また後年、玄勝の娘を娶り、玄勝の後援もあって文政三年二十歳の若さで江戸詰となり杉田立卿門下に入り、さらに青池林宗や古賀穀堂にも師事して修業をしている事実がある。<sup>(27)</sup>

△萩原立章

萩原立章は高鍋藩医である。前項に抄出した「日録」の記事の中<sup>(28)</sup>に高鍋藩医館氏の名があがっているが、さらに玄白の「形影夜話」をみると、薬効を考える上で気候風土との関連をよく吟味しなければならないという議論を展開する件りで、玄白の下に集つた松前藩医米田元丹（工藤兵助門人）、津軽藩医樋口道泉とならんで「余が門人日向高鍋の医官」として福崎大順、萩原立章らがそれぞれの体験を語ったことを紹介している。この立章について

高鍋侯還日州、萩立章の高鍋侯に従いて日州に還るを送る。」と題して、

使君向封域 使君封域に向い  
才子好追陪 才子追陪するに好し

近帶青雲色 近くに青雲の色を帶び

遙帰紫海隈 遥かに紫海の隈に帰る

金丹従日熟 金丹は日に従いて熟し

彩筆曇年開 彩筆は年を置<sup>かき</sup>ねて開けり

欄衣趨庭去 欄衣にて庭に趨り去らば

豈唯勝老萊 豈に唯だ老萊に勝るのみならん

とある。経験を重ねて医学、文学に長じ主君に仕える立草を斑欄衣にて庭を舞う老萊（周代の孝子、七十歳になつてもなお小兒のまねをして親を喜ばせたという）にたとえているものである。

△小林令助△

小林令助は美作の医者である。詳しい事跡などは判らないが、「日録」には二篇の作品が記録されている。一篇は寛政二年（一七九〇）二月十七日条に

送令助之作州 令助之作州に之<sup>ゆ</sup>くを送る  
春満東都十万家 春は東都十万家に満ち  
烟霞深處競繁華 烟霞深き處繁華を競う

杉田玄白をめぐる人々（その一）

故人何事報離別 故人何事ぞ離別を報ず  
忽向天涯旧里花 忽ち天涯旧里の花に向うと

とあるものである。他の一篇は同年三月四日条に、

業成才子作州帰 業成り才子作州に帰す

花散千山映落暉 花は千山に散りて落暉に映ゆ

折得一枝持贈意 一枝を折り得て持つて意を贈らば

行前應見作雲飛 行前應に雲と作りて飛ぶを見るべし

とあるものである。いずれも修業を終えて郷里への旅に発とうど

いう門弟の前途を期待する意をこめた送別賦となつてゐるといつてよいだろう。この後、玄白より令助にあてた書状が数通あり片桐一男氏により紹介されている。<sup>(29)</sup> 中でも享和三年（一八〇三）十二月十一日付のものは興味深い内容のものである。すなわち、最早自分は老境に及んで蘭学は久しく廃したが長生を心がけているが、内科のことは杉田伯元が、外科のことは大槻玄沢がそして解剖のことは宇田川玄真が研究を続けており、この三人に託しあつて彼等の大成を楽しみにしているのだとして七十一歳の老境にある玄白の心境を伝えている。そしてさらに玄白半生の医学研鑽の成果を集成した医学論「形影夜話」の刊行の近いこと、出来次第贈呈することを約束している。そもそもは令助より痔疾の治療方法についての問合せがあり、それに応える返書として発信されたものであるが、玄白にとって小林令助の存在は心にとま

る弟子の一人であつたであろうことを推測させる書状である。

## △井秀輔▽

「日録」の寛政十年（一七九八）九月二十二日条に次の詩がある。

## △樋口道泉▽

「日録」の寛政四年（一七九二）四月二十三日条に「送樋道泉従津軽侯之国、樋道泉の津軽侯に従いて國に之くを送る。」と題する次の詩篇がある。

。

送井秀輔帰郷 井秀輔の帰郷を送る

仙子三年従鷦冠 仙子三年<sup>かつかん</sup>鷦冠に従い

黄金常煉竈中丹 黄金もて常に竈中の丹を煉る

業成雲外帰郷日 業成りて雲外に帰郷の日

拭目親朋迎羽翰 目拭いて親朋羽翰を迎える

荒天万里望悠々 荒天万里望み悠々たり

従駕辺疆幾日休 駕に従いて辺疆にゆくこと幾の日か<sup>いつ</sup>休まん

海接毛夷多異俗 海は毛夷に接して多く俗を異にし

地通羽塞早知秋 地は羽塞に通じて早く秋を知る

樽前惜別難分手 樽前に別れを惜しみて分手し難く

席上論心暫解愁 席上に心を論じて暫らく愁を解く

却憶陪遊臨合浦 却つて憶うに陪遊合浦に臨み

明珠揃得向誰投 明珠を揃り得て誰に向いて投ぜん

玄白の下での医術修業三年、業なつて帰郷の日、郷里の親しい友人たちがその報に注目していることだろうという。「日録」中にはこの他に関連の記事なくフルネームも不明である。

## 三

次に知人の旅発ちに因んで創られた作品は諸藩の医師でそれぞれの藩主に同道しての江戸出立にさいして詩を贈るというもの二名、二篇、その他七名、七篇である。これらの中、とくに後者の七名の中には、あるいは玄白の門人も含まれている場合もあるかも知れないが、詩の内容そのものからは不明であり又、他に関連記事も見えず暫くはこのようにしておきたい。

樋口道泉は江戸定府の弘前藩医で産科を得意とした。寛政九年十二月、上原元永、桐山正哲とともに医学師範を命ぜられ、江戸敷内<sup>(30)</sup>の弘道館において上原の素問、桐山の本草綱目と並んで尙論篇を講じている学医であった。「日録」では、寛政元年閏六月十八日及び同二年十一月十四日に、また「形影夜話」にもその名が見え、玄白との関係を推測しうる。蝦夷地に接した遠い辺境の地に赴く友人との別れを惜しみ、また貪官汚吏多く明珠を産出しなくなつた合浦に、漢の孟嘗が善政を施したので再び明珠の産出を見るようになつたという故事をふまえて国元での善き仕事を期待して餞とした作品である。

△木昌磧

「日録」の寛政十二年（一八〇〇）閏四月十七日条に、「送木昌磧従候駕暫帰故郷、木昌磧の君侯の駕に従いて暫し故郷に帰るを送る」と題した次の詩篇がある。

使君千騎向神州 使君千騎神州に向う  
才子従陪難歩留 才子従陪して歩留め難し  
来往寸陰好須惜 来往の寸陰好しく須らく惜しむべし  
未聞日月與人遊 未だ日月の人と遊ぶを聞かず

君採陽泉茶 君は陽泉の茶を探り  
帰郷幾度煎 郷に帰りて幾度か煎ず  
清風生習々 清風生じて習々  
七椀至神仙 七椀にて神仙に至らん

主君に陪従して伊勢に向った木昌磧なる人物であるがフルネームはわからない。医師かと考えられるが定かではない。「日録」の享和元年（一八〇一）十二月二十一日条に、「昌磧代作」とあって

次の漢詩が記されている。

哭墨河 墨河を哭す  
六十九秋残夢裏 六十九秋残夢の裏  
視朋帰土比年頻 朋の土に帰るを覗ること比年頻りなり  
送君又減纏留友 君を送りて又纏かに留まりし友を減じ  
使我徒慳未了因 我をして徒らに未了の因を慳しましむ  
墨水影寒同賞月 墨水影寒くしては同に月を賞で  
花堤色動共尋春 花堤に色動きては共に春を尋ねり  
老來感事偏深切 老來事に感すること偏に深切  
欲作哭詩先愴神 哭詩を作らんとして先ず神を愴む

杉田玄白をめぐる人々（その二）

とある人物と同一かとも思われるが未詳である。陽泉茶は中国の名茶陽羨茶のことであり木氏の医業に従っていることを意味するものであろう。

△秋春龍<sup>(31)</sup>

秋春龍は忍藩医である。フルネームは未詳である。「日録」の文化元年（一八〇四）四月二十日条に、君侯に随従して大坂へ向う秋氏を送る詩篇が書きとめられている。

送秋春龍之浪華 秋春龍の浪華に之くを送る  
不朽文兮不昧心 不朽の文と不昧の心  
文章變態有古今 文章の変態は古今あり  
斯心何物同與異 斯の心は何物ぞ同と異とありや  
人々所志或淺深 人々志ざす所或いは浅深あればなり  
丈夫落々宜有為 丈夫は落々として宜しく為す有るべく

墨河なる人物の死を悼んで玄白に代って哭詩を作っているわけである。また「日録」の文化元年（一八〇四）四月八日条に、「送木氏之郷。木氏の郷に之くを送る。」と題して、

「日錄」の寛政元年（一七八九）八月三十日条に記された「送糟子梁奉使勢南兼之故郷、糟子梁の使を勢南に奉じ兼ねて故郷に之くを送る。」と題する作品は次の通りである。

不為良相為良医	良き相たらざれば良き医たれ
良医断々無他枝	良医は断々他枝無し
預知順逆不用疑	預め順逆を知りて疑いを用ひず
欲吐吐兮欲下下	吐かんと欲せば吐かしめ下らんと欲せば下す
従症調薬治患者	症に従いて調薬し患者を治す
其道由來概如此	其の道由來概して此の如きも
廢者多成者少也	廢する者は多く成る者は少き也
忍藩秋子才翩々	忍藩の秋子は才翩々たり
更陪侯駕万里天	更に侯駕の万里の天にゆくに陪す
好向浪華対病客	好しく浪華に向りて病客に対し
施治日無違自然	治を施すに日々自然に違う無かれ

神州一望氣殊雄	神州一望すれば氣は殊に雄たり
使者乘秋發海東	使者秋に乗じて海東を發す
自愧老聃臨別語	自ら愧ず老聃臨別語
人称王式誦詩風	人は称す王式詩風を誦すと
興來好宿明星店	興來たらば明星店に宿るに好く
奉命遙朝天照宮	命を奉じて遙かに朝す天照宮
行矣回韶向郷里	行きて韶 <small>さる</small> を回らし郷里に向わば
親朋應說賈臣回	親朋應に賈臣回ると説うべし

丈夫たるもの小事にこだわらず良相たれ。さもなくば良医たるべきであるとして、さらに良医の条件を述べる。それは症に従いて調薬し、また治を施すに日々自然に違うことなしということである。

この心がけで浪華の地で病客に對せと錢けの言葉を贈っている。晩年の杉田玄白の医学觀を率直にのべた送別賦である。この時の忍藩主は阿部播磨守正由である。<sup>(32)</sup> 寛政八年（一七九六）二月、養父正識の跡を襲つたのち奏者番、寺社奉行を経て、

文化元年正月に大坂城代に任じている。この年の四月、秋氏は主君に隨行したわけである。この後正由は文化三年に京都所司代となり同五年任地で歿している。

この糟氏については「日錄」中になお二篇の作品がある。一篇は、「蒼松篇賀糟子梁六十、蒼松篇 糟子梁の六十を賀す」と題するもの（天明七年十一月二十五日）、他の一篇は、「答糟子梁、糟子梁に答う」と題するもの（天明八年四月十六日）である。また「日錄」には見えないが「遺稿」にも一篇ある。「慰糟子梁悼男、

糟子梁の男を悼むを慰さむ」と題する作品である。これは第六十七番目に記載されており、寛政三年四月十九日の作品と、同年八月三十日の作品の間に位置しているものである。順を追つて列記しておきたい。

蒼松千尺古	蒼松千尺古く	交情雖無異	交情異なる無しと雖も
庭際縁盈々	庭の際に縁盈々たり	互驚双鬢霜	互いに双鬢の霜に驚く
勁節凌霜固	勁 <sup>きよ</sup> き節は霜を凌いで固く	年命元已定	年命は元より已に定まれば
秀姿含氣清	秀でたる姿は氣を含みて清し	豈結憂中腸	豈に憂中の腸を結ばんや
歲寒無改色	歲寒うして色を改むる無く	名利終可廢	名利は終に廢す可し
風過有余声	風過ぎて余声有り	富貴難為常	富貴は常たり難し
席寿君看取	席寿君看取せよ	君遂采薇志	君采薇の志を遂げなば
偏依雨露盛	偏に雨露の盛んなるに依るを	相隨隱首陽	相隨いて首陽に隠れん
親朋有贈詩	親朋に贈詩有り	憐君深座對黃昏	憐む君の深座して黃昏に対し
句々成感傷	句々感傷を成す	何處將招冥漠魂	何處よりか將に冥漠の魂を招かんとするを
反顧少壯時	少壯の時を反顧すれば	掌上明珠光已失	掌上の明珠光已に失せるも
同舍且並牀	舎を同じうし且つ牀を並べたり	腰間ヒ首今猶存	腰間のヒ首今猶お存す
焚魚勸醴酒	魚を焚きて醴酒を勧め	衰顏聊慰清秋色	衰顔聊か慰む清秋の色
說心一尽觴	心を説きて一に觴を尽くす	双鬢新看白雲繁	双鬢新たに看る白雲の繁きを
中似胡與越	中ごろ胡と越に似て	遮莫当今無子日	<small>さもあらばあれ</small> 当今子無きの日
官跡召殊方	官跡は殊方に召さるる	不如縱酒學東門	酒を縱 <sup>ほじい</sup> ままにして東門に学ぶに如かず
日月漸代謝	日月は漸く代謝するも		
復幸非參商	復た幸いに參商に非ず		

る。富貴を望み名利を追う年令ではない。君が隠棲を望むならば伯夷・叔齊にならって共に首陽山に隠れようと詠んでいる。第三の作品では子を失つて悲しむ糟氏を「酒をほしいままにして其子死して憂うことのなかつた東門吳に学べ」と慰めている。

ところで、この糟子梁なる人物は「日録」中に別に数件記載されている「糟谷伴二郎」のことであると考えられる。関係記事を抄出してみると——天明七年十一月二十三日「糟谷伴二郎振舞席上。末遠く岩根松かね三冬かな」、同八年十月二十五日「墨山先生、糟谷・太田・山口三氏同道、日暮上野の方へ郊行。」、同年十二月四日「夜糟谷宴。墨山先生談。肥後国に先年渡辺郡兵衛と云者、日本國中諸名山に登り富士人穴に入と云。」、寛政二年七月九日「糟谷伴二郎三十石御加増」、同年十一月二十四日「夜糟谷宴」、寛政三年八月十五日「糟谷小八郎死」、同年十二月二十四日「糟谷伴二郎死」——ある。前述の事項に重ねあわせてみると、天明七年十一月二十三日の「糟谷伴二郎振舞」とあるのは還暦の祝宴であり、これに因む作品が同月二十五日に記録されたものであると考えられる。また寛政三年八月十五日の「糟谷小八郎死」というのも「慰糟子梁悼男」なる作品に対応する事実と考えられる。

ここに抄出した記事に関連して登場する「墨山」とは小浜藩に仕えた西依墨山かと考えられる。天保三年版「続諸家人物志」に、「名は景翼、字は翼天、丹右衛門と称す、京ノ人成斎ノ子ナリ、若州侯ニ仕フ、家学ニ於テ大ニ性理ノ説ヲ発明スル事多シ、寛政十年五十八ニシテ歿ス講學日知録、墨山文集ヲアラワス」とある人物である。「日録」にはなお二件の記事がみられる。寛政元年

四月二十四日「雨大風暴風也昼後晴。在宿。墨山來飲。」とあり、また同二年十二月十九日「同々。深川・日本橋病用。墨山先生來話。直。」とあるものである。また松平定信の側近水野為長の「よしの冊子」に、「酒井修理殿、國元ニ抱置れ候儒者山崎西寄丹右衛門と申もの、此節勤番被ミ申付出府いたし居り候由。雜説ニ越中守様、修理殿御逢被レ成候節、右丹右衛門事御尋被遊候ニ付、若公儀へ被ミ召出もする歟と修理殿ニて疑を起し、来夏迄勤番申付、江戸へ呼寄置候と申さたも御座候よし。」として天明八年十二月頃の墨山につわる風聞を伝えている。柴野栗山らが儒者として幕府に抱えられるようになつたことの周辺にある一挿話として注目すべきかもしれない。墨山の江戸出府がもしこうした特殊事情の下でのことであるとすれば、この前後に四回ほどあつた玄白との接触の機会に何が話題となつたか大へん興味深いものがある。

墨山の父西依成斎についても「日録」に記録がある。天明八年四月十四日に「正月晦京師大火因賦成斎先生」とあって成斎の詠んだ詩が書きとめられている。また寛政三年九月朔日には「賀西京成斎先生九十春、西京の成斎先生の九十の春を賀す。」と題して、

天龍鴻儒借以年	天鴻儒を籠して借すに年を以つてす
逢迎饗鑠對群賢	逢迎饗鑠として群賢に対す
高堂旧盛風流会	高堂旧より盛んなり風流の会
佳宴新開日月辺	佳宴新たに開く日月の辺 <small>とこしえ</small>
黃髮授經長不改	黃髮經を授くるを長に改めず

朱顔作頌醉陶然　朱顔頌を作りて酔いは陶然  
時依千里京城隔　時に千里京城隔たるに依つて  
遙呈南山称寿篇　遙かに呈す南山称寿の篇

という成斎の長寿を祝う作品を記録している。成斎は「続諸国人物志」<sup>(35)</sup>によれば「若狭ノ人京ニ遊テ若林強斎ニ学テ業ヲ大坂ニ講ス、又京ニ移ル、蓋シ明和中ヨリ山崎氏ノ学ヲ奉スル人相繼テ没故ノ其説ヲ講スル者少シ、故コレヲ奉崇スル者皆斯人ニヨル、称テ垂加ノ学統トス、程朱ノ旨ヲ闡發スル事頗ル多、近世性理ヲ談スル者関西ニテハ久米訂斎及ヒ成斎ヲ推シ、関東ニテ東斎玉水ヲ推スト云フ、寛政中九十六ノ歿ス」と評価されている人物である。

△文仲・玄深▽

「日録」の寛政元年（一七八九）六月二十七日条に二篇の送別賦が記されている。

△林甫俊▽

文仲については、丹波福知山医官で大槻玄沢の門人であった有馬文仲元晃であると考えられる。有馬文仲は大槻玄沢の口述を筆記して「蘭説弁惑」をまとめた人物である。芝蘭堂入門帳によれば玄沢への入門は享和三年（一八〇三）八月十五日であった。<sup>(36)</sup> 玄深については未詳である。木曾地方の人であろうか。

送文仲 文仲を送る  
芙蓉天半色 芙蓉天半の色  
摘得贈郎君 摘み得て郎君に贈る  
帰国能須見 帰国して能く須く見るべし  
其如鬼獄雲 其れ鬼獄の雲の如からん  
同送玄深 同、玄深を送る  
岐蘇十三駅 岐蘇十三駅

杉田玄白をめぐる人々（その二）

行々山氣清 行き行きて山氣清し  
此中何所在 此の中に何の在る所ぞ  
白雲似我情 白雲は我が情に似たり

「日録」の寛政十年（一七九八）四月八日条に、高玄勝及び覚端の送別賦にならん、「送林甫俊帰信州、林甫俊の信州に帰るを送る」と題した作品が記録されている。

江城花尽子規啼 江城に花尽きて子規啼き  
有客将帰鬱翠西 客有りて將に鬱翠の西に帰らんとす  
到日天涯若相望 到るの日天涯若し相望まば  
淺間煙霧使人迷 浅間の煙霧人をして迷わしめん  
碓氷（鬱翠）、浅間と故地に由縁の地名をよみこんで送別の言葉としている。他に関連の記事なく、人物像が明らかにならないが、高玄勝、覚端への送別賦と併記されており医業修業を終えた弟子であったように思われる。

△月仙▽

送月仙帰郷 月仙の郷に帰るを送る

双涙淒然下 双涙淒然と下り

如何此別離 如何んせん此の別離

縦為再会約 縦え再会の約を為すも

衰老真難期 衰老真に期し難し

「日録」の享和三年（一八〇三）五月三十日条に記されたもの  
である。月仙については未詳である。

△李井公子▽

「日録」の享和三年（一八〇三）九月七日条に「戯代阿鶴奉送  
李井公子之洛陽、戯れに阿鶴に代りて李井公子の洛陽に之くを奉  
送す」と題した次のような長篇が記されている。

有鳥有鳥生仙家 鳥有り鳥有り仙家に生まる  
瑤池水夸珠樹花 瑶池の水に珠樹の花  
縱横翔舞飲且啄 縦横に翔び舞い飲み且つ啄む  
常伴羽客醉紫霞 常に羽客に伴いて紫霞に酔う  
幸所得君賜恩殊 幸いに得る所の君恩を賜ること殊なり  
入居帳内出乗軒 入りては帳内に居り出でては軒に乗る  
芝田生雛凡鳥異 芝田に雛を生むに凡鳥と異なり  
素羽丹頂喜相呼 素羽丹頂喜びて相呼べり  
金衣菊裳他所羨 金衣菊裳は他の羨む所

李井公子とは如何なる人物なのか詳ではないがこの長詩の詞書きには「李井公子ハ布衣の交りをもなし給ふにより傾蓋如故御恵をうけ参らすこと四の春秋を重ぬ年を以て期するの身にてハ人よりも猶御名残りおしく老の涙を拭ふ、梅に耻しひとくめてん吾妻菊」とある。身分や地位を問題としない交わりをして旧知の間がらのよう親しむこと四年の歳月を重ねたということであろう。また詩に詠まれたところによれば、やはり人も羨む境涯にあつたが、一旦は不遇のことについ（この時に江戸へ下ったのではなかろうか）。このたび京へ帰ることになった。そこは必ずしも公子にとっては心安まるところではないかもしねないがこの世に良いこ

自安長此共歎娛 自ら長く此れ歎娛を共にせんと安んぜしに  
何図更逢沙苑射 何ぞ図らん更に沙苑の射に逢い

一飛千里宿無舍

一たび千里を飛んで宿るに舍なし

飛揚飛降鳴九臯

飛び揚り飛び降りて九臯に鳴き

哀鳴聞天昼與夜

哀鳴天に聞こゆ昼と夜

哀離惆悵得人憐

離るるを哀しみ惆悵人の憐むを得

籠中受養独淒然

籠中に養を受けて独り淒然

徒思當時緑山駕

徒らに思う當時緑山の駕

翻翰連声日翩々

翰はなを翻し声を連ねて日々に翩々たるを

聞君今宵欲向洛

君が今宵洛に向わんとすを聞く

洛陽雖美交情薄

洛陽美なりといえども交情薄し

清響飛容無勞思

清響飛容思いを勞するなれ

天下何有楊州鶴

天下に何ぞ楊州の鶴有らん

とづくめのことは余り期待出来ないものである。いたずらに心労を重ねることのないようにしてほしいという。高貴の公子を鶴にたとえたためか孫女の鶴（伯元の子）に代つて送別の詩を詠んだというかたちをとっている。

またこの送別のことのあつた前月、八月十四日には「日録」に

よれば李井公子をはじめとする数人とともに両国遊行のことがあつたという。待宵の月を見ようと李井公子をはじめ「風流のしれもの」三四人を語らつて墨田川を溯り、昼は両岸の月をながめ、夜は飛鳥の山に上つて「虫撰み」をしようと約していたが、あいにくの激しい風雨で纏も解き得なかつた。しかしそのままに止めるのは口惜しいとて「手を引腰を押し青柳か二階に」登つた。「伊丹池田の醇醪を盛り数を尽して廻せハ或ハ山の幸海の幸に意地きたなきあらはす新声一曲醉を勧れハ附鬚の他人の髪なる入歯我物かほなる共ニ老の将に至るをし」とあって、最後に「待宵や月はともあれ名にめてん」という句が書き留められている。ともあれ李井公子なる人物は玄白周辺の人々のうちではとくにその出自の点においてやや珍しい存在であるといえよう。

玄白がその晩年に詠じた数々の送別賦を通して玄白ゆかりの人々を追つてみた。都合十八人のうち門弟九人、その他の知人九人である。知人九人のうちには門弟を含んでいるかもしけない。門弟のうち六人は仙台、水沢、米沢、高鍋の各藩医であつた。知人九人の中にも津輕、忍の藩医と医者と思われるもの三名あり多くは医者であつたということになる。個々の人物伝が必ずしも明き

#### 注

- (1) 昭和十九年、生活社刊。昭和五十六年、青史社再刊。なお原本の写真複製版もあり隨時参照した。
- (2) 松崎「杉田玄白をめぐる人々」(『史学』五十巻記念号。)
- (3) 慶應義塾医学部図書館蔵。
- (4) 「白居易 上」(『中国詩人選集』第十一巻) 六〇ページ。
- (5) 慶應義塾医学部図書館蔵。芳賀徹「『玉味贈』と『耄耋独語』」(『比較文化研究』第十六輯)
- (6) 大槻如電「磐水事略」(『磐水字鑑』下。)
- (7) 「磐水存鑑」所収の「磐水事略」及び「年譜」による。
- (8) 山口稠「玄沢先生とその後(一)~(三)」(『掃苔』八一二~五所収。)
- (9) 高野長運「高野長英伝」一一ページ。四三一六一ページ。
- (10) 「高野長英伝」四九ページ。
- (11) 「高野長英伝」五〇一五三ページ。
- (12) 「高野長英伝」六八一七四ページ。
- (13) 酒井シヅ「堀内文書関係年譜」(『日本医史学雑誌』一八一一所収。)
- (14) 片桐一男「堀内文書の研究四、堀内文書第一号」(『日本医史学雑誌』一七一四所収。)
- (15) 「米沢市史」五三四ページ。九四〇ページ。注(13)。堀内

らかではないので不十分ではあるけれども、その門弟達の広がり、あるいは米沢藩その他の特定の藩とのつながり、またこれらの人々との交流の中に生まれた玄白晩年の心豊かな教養人としての日常などを幾分なりとも明きらかにしたのではないかと思う。

淳一「米沢藩々医堀内家とその周辺」(『日本医史学雑誌』一八一一所収。)安彦孝次郎「上杉鷹山の人間とその生涯」二七三ページ。

(16) 注(13)「大槻家門人帳」(板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』五一五ページ。)

(17) 注(13)。

(18) 注(13)。

(19) 注(13)。片桐一男「堀内文書の研究一〇」(『日本医史学雑誌』一〇一一所収。)「幕末から明治初期にかけての教育事情」(『米沢市史編集資料』第八号所収。)

(20) 注(13)。

(21) 堀内淳一「米沢藩医堀内家とその周辺」(前掲)

(22) 小川鼎三「堀内文書にみる蘭学者の生活と思想」(『日本医史学雑誌』一八一一所収。)

(23) 注22。堀内亮一「堀内素堂」六一八ページ。

(24) 注22。

注22。

(25) 片桐一男「堀内文書の研究(一)」第一八号文書(『日本医史学雑誌』一七一一所収。)

(26) 注22。堀内亮一、前掲書

(27) 注22。

(28) 「形影夜話」(『日本思想大系・洋学上』所収。)

(29) 片桐一男「杉田玄白」三二五ページ。三二九ページ。

(30) 松本明知「桐山正哲と『解体新書』」(『日本歴史』一九七所収。)森銑三「村尾元融伝の研究」(『森銑三著作集』第七卷、二六一ページ。)

(31) 「日録」刊本では「春蔵」と読んでいるが原本の写真版によれば誤読と思われる。「遺稿」では「春龍」と読めるのでやや

疑問も残るがしばらくは「遺稿」に従うこととする。

(32) 「行田市史」下巻、八八ページ。

(33) 「近世人名録集成」第三巻、一二五ページ。

(34) 「隨筆百花苑」第八巻、二八〇ページ。

(35) 「近世人名録集成」第三巻、一二五ページ。

五一五ページ。

(36) 「蘭説弁惑」(八坂書房刊「生活の古典双書」)板沢、前掲書、